

歴史とのランデブー

——『現代アメリカ外交の変容』執筆に寄せて

村田 晃 嗣

アメリカの朝

初の黒人大統領候補か、それとも初の女性大統領候補か。二〇〇八年のアメリカ大統領選挙に向けて、民主党大統領候補の指名獲得競争が熾烈化する中で、バラク・オバマ上院議員はロナルド・レーガン元大統領の名を何度か口にした。「われわれはどうやってロナルド・レーガンの『アメリカの朝』に戻るだろうか」。「アメリカの朝」とは、一九八四年大統領選挙でのレーガン共和党陣営の有名な諷刺文句であった。この時、レーガンはみごとに再

選を果たした。オバマが共和党の英雄の名を口にしたため、オバマに敵対していたヒラリー・クリントン上院議員は、彼がレーガンの政策を追認していると非難したほどである。

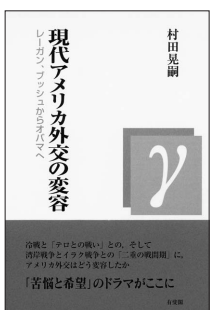
確かに、「核兵器のない世界」を呼びかけるオバマ大統領は、核兵器を「時代遅れで無意味なもの」にしようとしたレーガン大統領の路線を踏襲していた（レーガンはそのために戦略防衛構想（SDI）を真剣に推進した）。しかし、民主党の、しかも、リベラル派のオバマは、共和党保守派のレーガンとは、多くの点で政治的信条や姿勢

を大きく異にしていた。そのオバマですらレーガンを賛美するほど、二一世紀に入ってアメリカ政治におけるレーガンの偶像化は進んでいた。

歴史とのランデブー

誰よりもレーガンを偶像視し模倣しようとしたのは、オバマではなく、その前任者であろう。ジョージ・W・ブッシュにとって、レーガンは父ジョージ・H・ブッシュよりもはるかに偉大な、大統領のロール・モデルだったのである。

ブッシュがレーガンを崇拜したよう



村田晃嗣 [著]
『現代アメリカ外交の変容——
レーガン、ブッシュからオバマへ』
四六判、294頁、2520円（税込）

に、レーガンにも政治上の英雄がいた。フランクリン・D・ローズヴェルト大統領である。オバマがレーガンの「アメリカの朝」を語ったように、レーガンもまたローズヴェルトの「歴史とのランデブー」という言葉をたびたび用いた。そもそも、若い頃のレーガンは民主党員であり、親子して熱心なニューディール政策の支持者であった。

レーガンはしばしば、教条的な保守派とみなされてきた。反共主義と「強いアメリカ」、「小さな政府」への彼の

信条は、堅固であった（政策的には、後者を守れなかったが）。だが、彼は

南部の保守派のような人種差別主義者ではなかったし、ローズヴェルトとニューディール政策への崇拜と愛着も生涯変わらなかった（レーガンによれば、変わったの自分ではなく、民主党なのである）。また、この元ハリウッドB級俳優は、信念の人であるとともにエンターテイナーであった。自分の個人的な魅力を過信し、ソ連の指導者を懐柔できると信じた点でも、レーガンはローズヴェルトの衣鉢を継いでいた。さらに、かつてのドワイト・アイゼンハワー大統領のように、レーガンは受動的で非知性的な大統領として過小評価されがちだが、実はなかなか柔軟かつ巧妙であった。カリフォルニア州知事として学生運動と対峙した彼のイメージを延長するだけでは、大統領としてのレーガンを正確には理解できない。なによりも、レーガンと敵対す

る政敵ですら、彼の個人的魅力を否定することはできなかった。

レーガンの子

多くの模倣者がそうであるように、ブッシュも「英雄」の一面を恣意的に継承したにすぎない。かつてレーガンが代表し父ブッシュが取り込み切れなかった共和党保守派に迎合しながら、ブッシュは「強いアメリカ」を力説した。しかし、彼にはレーガンのような人間的魅力と抱撰的な表現力、それに柔軟性が欠けていた。結果として、外交でも内政でも、この「レーガンの子」は養父の政治的遺産を費消し尽くし、四半世紀にも及ぶ保守の時代、「レーガンの時代」を終わらせてしまったのである。レーガンの成功がブッシュを呼び出し、ブッシュの挫折がオバマの登場を促した。ただし、一九八〇年にレーガンが大統領に当選した段階では、ジミー・カーター大統領に代

表されるリベラル派の敗北が明らかになったのであり、保守の勝利が確定したわけではなかった。レーガンのカリスマ性と手腕に助けられながら、一九八〇年代を通じて、保守勢力は政治的主流にのし上がっていく。

同様に、二〇〇八年のオバマの勝利も、ブッシュに代表される保守の敗北を意味するにすぎず、リベラルの勝利を約束するわけではなかった。事実、大統領一年を経て、すでにオバマ大統領は深刻な苦境に立っている。オバマはレーガンと抱撰的な表現力を共有しているが、不動の政治的信念を有しているようには見えない。彼もまた「英雄」の片面的な継承者かもしれない。

レーガンを原点に

このように、レーガンを原点に据えて、政治的リーダーシップの連続と非連続から、四半世紀にわたるアメリカ外交の変容を描いてみたい。これが昨

年末に刊行した拙著『現代アメリカ外交の変容——レーガン、ブッシュからオバマへ』執筆の動機であった。まさに「歴史とのランデブー」である。

拙著には、もう一つの課題がある。それはイラク戦争を歴史的な文脈の中で考察することである。これもまた「歴史とのランデブー」であろうか。イラクでの混乱が続く、ブッシュが罵声の中で退陣した今日、イラク戦争を断罪的に論じることはいとた易い。もちろん、イラク戦争には多くの過ち、しかも、おそらく回避できたであろう過ちが含まれている。だが、この戦争を断罪するだけでは、われわれがそこから学ぶところは少なからう。とはいえ、この戦争は不幸にしてまだ続いており、これを歴史の実証研究の対象として精査するには、まだ時期尚早である。

二重の戦間期

そこで、拙著では「二重の戦間期」という概念を提示してみた。

冷戦は事実上の第三次世界大戦であった。象徴的に言えば、一九八九年一月九日にベルリンの壁の倒壊が始まった頃に、この第三次世界大戦は破局を迎えずに終焉に向かった。因みに、その一年ほど前には、西ベルリンからレーガン大統領が「この壁を壊してください、ゴルバチョフさん！」と呼びかけていた。やがて、二〇〇一年九月一日に同時多発テロがアメリカを襲った。「レーガンの子」ブッシュは「テロとの戦い」を宣言する。事実上の第四次世界大戦の始まりかもしれない。とすれば、11・9から9・11までの一二年間は戦間期ということになる。これはジョージ・ワシントン大学教授のジェームズ・ゴールドガイヤーらの議論である。

さらに、湾岸戦争からイラク戦争までを戦間期とみなすことも、十分に可能である。この二つが連動して「二重の戦間期」を構成したというのが、筆者の議論である。まず、冷戦の終焉が湾岸戦争という大規模地域戦争を可能にした。そして、湾岸戦争以降、中東、特にサウジアラビアに米軍が駐留し続けたことが、アルカイダによる同時多発テロの主要かつ直接的な原因であった。さらに、「テロの戦い」の戦時高揚感の中で、ブッシュ政権はイラク戦争を決断し、議会と世論はそれを追認したのであった。この間、国際政治におけるアメリカの地位は他の追随を許さないものになっており、また、内政では「レーガンの時代」の頂点として保守化が著しく進んでいた。いづれも、アメリカとブッシュ大統領の自制を困難にする状況であった。こうした議論がどれだけ説得力をもつのかは、ひとえに読者の判断と、よ

り長期的には歴史の判断に待たなければならぬ。しかし、いづれにせよ、われわれに多大な犠牲を強いたイラク戦争を、マクロとミクロの両面から多角的に考察し続ける作業は、不可欠であろう。本書がそのための問題提起になれば、これに過ぎる幸いはない。

『FD Rの影の中で』

さて、先述のように、オバマ大統領は支持率の急落に悩み、内外の難題に直面している。オバマ大統領と同様、日本でも民主党が政権交代という「変化」を訴えて昨年八月の衆議院総選挙に圧勝し、九月には鳩山由紀夫内閣が成立した。しかし、その鳩山内閣も今では支持率の急落に悩み、内外の難題に直面している。一九八〇年のアメリカ大統領選挙がリベラル敗北ではあっても、直ちに保守の勝利を意味したわけではなかったように、二〇〇八年の米大統領選挙も昨年八月の日本の総選

挙も、保守の敗北ではあってもリベラルの勝利を確約するものではなかったのである。一時的な選挙の結果を実質的なものにするには、周到な戦略とリーダーシップ、そして、おそらく幸運が必要であろう（まちがいがなく、レーガンはこれに恵まれていた）。

フランクリン・ローズヴェルトは彼以降の歴代大統領に、直接間接を問わず多大の影響を与えてきた。レーガンもその一人である。こうしたローズヴェルトの歴史的な影響力については、ウィリアム・ルクテンバーグ教授の名著『FD Rの影の中で』が詳細に分析しており、しかも、この書物は初版以来何度も改訂を重ねている。拙著こそがこのような名著に比肩しうるわけもないが、オバマの時代を経て、再びアメリカ外交や日米関係の変容を吟味する機会をえたいと、今は念願している。

（むらた・こうじ 同志社大学法学部教授）